

目次

創刊にあたって	1
図書館長 岸田 理	
New Library Seta	2
瀬田図書館課 河村由紀彦	
私と図書館	4
文学部4年 折橋麻由美	
私と図書館	5
文学部4年 進藤典子	
歴史的経営情報の収集	6
経営学部 助教授 藤田誠久	
図書館の仕事紹介シリーズ 1	7
《レファレンス》	
深草図書館課 村上美代治	
龍谷大学図書館蔵 貴重書紹介	8
《つれづれ草》(延徳本)	
文学部助教授 大取一馬	
龍谷大学図書館の歴史 1	9
《江戸時代に図書館はあったか?》	
瀬田図書館課 成山雅康	
私の推薦図書	10
《花影》大岡昇平 著	
文学研究科 のぶ かずとし	
私の推薦図書	10
《いいものみつけた》高峰秀子 著	
文学部4年 梅田敦子	

創刊にあたって

岸田 理

龍谷大学図書館報『来ぶらり』がいよいよ発行される運びとなった。古い歴史と伝統を持つ図書館にかつてこのようなものが存在しなかったこと自体、驚きでもあるが、ともかく喜ばしい限りである。

この館報はあくまでも学生諸君向けのPR誌であり、図書館員全体が衆知を集めてその編集に取り組むつもりであるが、学生諸君の側でも良いアイデアがあれば、どしどし提出ねがいたい。文字通り龍大人全体による良き図書館報となるために。

『来ぶらり』とは“Library”をもじったニックネームであることは言うまでもない。まさしく“Welcome to our “Libraries!”の意をこめてわが図書館員が命名したものであり、諸君が食欲を満たすために生協食堂をしばしば訪れるのと同様に、知的好奇心を大いに満足させるために大宮・深草・瀬田の3館をしばしば訪れていたいただきたいとの願いもこめた命名である。

New Library Seta

河村由紀彦

瀬田キャンパス・メインストリート、最初に現れるタイル貼りの建物、それが瀬田学舎の教育研究の中核となる瀬田図書館なのです。

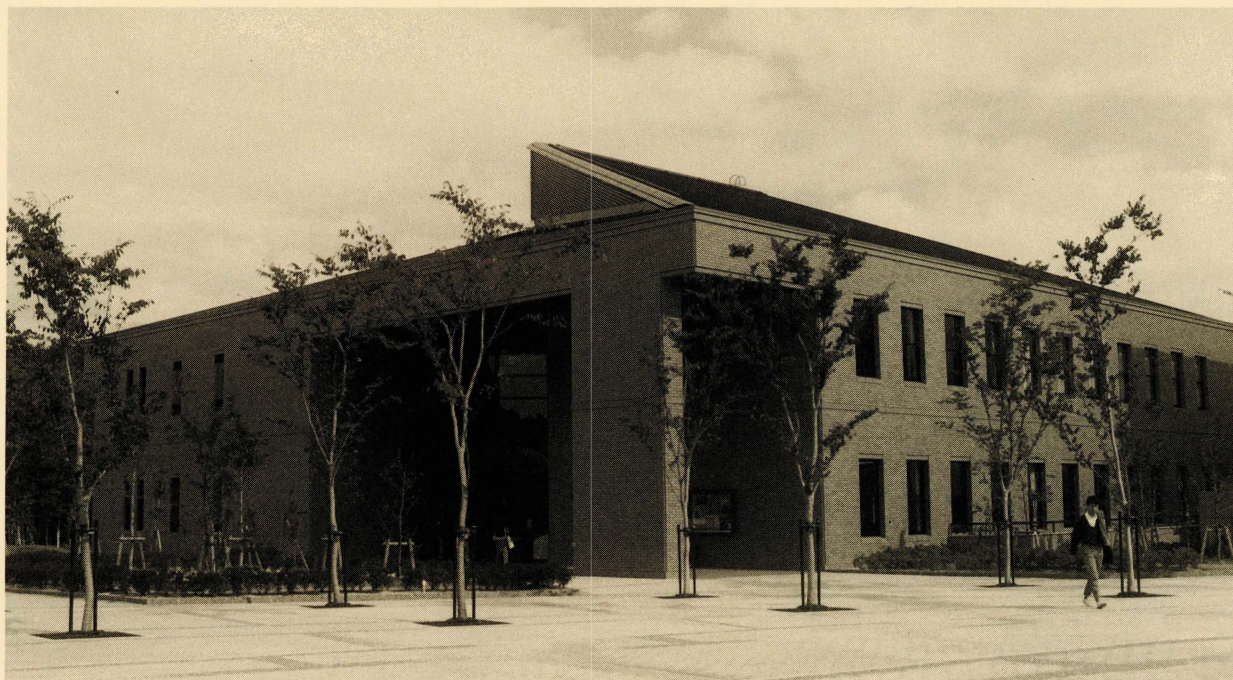
皆さんもご存じのとおり、本学には3つの図書館があります。モダンな洋風建築・アンティークな大宮図書館。初期の近代的図書館建築、現在3館の中心である深草図書館。そして本年度新築開店、琵琶湖のほとほ雄大な大自然の中、教育環境としては最高の瀬田キャンパスにひっそりと、いやいやどっしりとそびえ立つ(1号棟

がちと大きすぎるかな?)今、とってもトレンドイな建物、瀬田図書館。

この図書館、他の2つの図書館とはちょっと様子が違うんです。「どこが違うってか!」それじゃちょっと違った瀬田図書館、そのトレンドイな所をほんの少し紹介しましょう。

どこがトレンドイか?まずその建物、とってもシンプルな様ですが、実はとても機能的に設計されています。従来の図書館のような暗いイメージとは違い、自然光を一杯取り入れ、室内もゆったりとしたスペースを取り、皆さんがより学習しやすい環境を提供しています。一見2階建てのようですが、実は敷地の傾斜面を利用した3階建てなのです。B1Fにはテラスを設け、学習の場だけでなく皆さんの憩いの場になるように工夫しているんです。すごいでしょ。なに「これのどこがすごいんだ。」て。まだまだありますよ、瀬田図書館のトレンドイ。

次にご紹介するのはこの図書館の1番の目玉商品。それは図書館の全てのシステムが機械化されていることです。理工学部、社会学部の図書館としてふさわしいものとするために、図書館もハイテク・ニューメディアを駆使してコンピュータライゼーションを実現しています。ではそのシステムについて少し説明しておきましょう。



それは図書館の入口を入るところから始まります。正面入口に深草図書館でもおなじみのBDS(ブックディテクションシステム)のゲートがありますがよく見ると深草の物と少しばかり違う。そうカードチェックによるゲートシステムになっているんです。瀬田では学生・教員・職員がRINSカードと呼ばれるIDカードを所持し、このカードにより皆さんが龍大生であることをコンピュータが認識しゲートを開く仕組みになっているんです。「じゃカードを持たない深草、大宮の学生はどうなるんだ。」御心配なく。深草、大宮の学生については希望者に瀬田図書館カウンターで図書館用カードを発行しています。

瀬田図書館のどこを捜しても図書館におなじみのカードケースはありません。よく見て下さい。4台のコンピュータ端末がなにやら皆さんを待っている気配。そう瀬田図書館では従来のカード目録に代わり、この4台の端末で図書の検索を行い、瀬田にある図書の情報を得ることができるんです。この図書館のホストコンピュータは国際化時代にふさわしく実は外人さん(アメリカはDEC社製)なんです。すこしトレンドイかな。

こうして検索した図書を請求記号にしたがって捜すのですが、全面開架・階別主題別配架方式を採用していますので、図書館にあるすべての図書を手にして見ることが可能ですので簡単に目的の図書を捜すことができます。B1Fには人文科学系図書・学生用雑誌・新聞、1Fには社会科学系図書・参考書、2Fには自然科学系図書・学術雑誌といったように非常に分かりやすく配架されています。図書を借りる場合も借りたい図書とIDカードを貸出カウンターに提出するだけ、面倒な記入は一切ありません。コンピュータが皆さんのピンチヒッターとしてIDカードから個人の情報を、図書に貼ってあるOCRラベルから図書の情報を取り出し、即座に貸出手続きが完了します。返却時には借りていた図書を返却カウンターに手渡すだけでコンピュータが返却の手続きを行いません。コン



ピュータは返却すべき月日をしっかりと記憶していて、延滞等のチェックを厳格に行ないますので呉々も返却が遅れないようにして下さいね。

この他にも瀬田図書館ではハイテクを駆使し図書整理、予算管理等図書館業務のあらゆる所で機械化を行ない、一歩進んだ図書館を目指しています。

最後に紹介するのは瀬田図書館で皆さんに利用してもらえる施設です。まずはAV室。このAV室、ビデオ・カセット・CD等色々なソフトを皆さんに試聴してもらえるようになっています。次は学習室。ここには3つの学習室があり10名程度で学習が行えるようになっています。その他、座りごこち満点のソファを備えてある談話室、瀬田図書館にふさわしい、かつ新しい(出来るだけトレンドイな)雑誌を集めた新聞雑誌コーナー等、皆さんに利用していただける施設を取り揃えているんです。

色々瀬田図書館についてご紹介してきましたがまだまだ皆さんに知ってもらいたいことがたくさんあります。百聞は一見にしかず、瀬田の学生は勿論、深草、大宮の皆さんも是非一度ここ瀬田図書館に気軽に足を運んでみて下さい。

スタッフ一同皆さんのお越しをお待ちしています。

おっ気軽に!!

(瀬田図書館課)

私と図書館

折橋麻由美

「図書館」という所は、たくさんの図書があって、図書を借りたり、読んだり、又勉強したりする所というのが当たり前のことなのですが、公共の図書館よりも龍谷大学の図書館に親しみを感じているのは、大学の中にあるから、実に当たり前なのでしょうが、私は龍谷大学の「図書館」が好きなので「図書館」と私の関わりについて書こうと思います。

4年前、入学したばかりの私が深草図書館のドアを開いたのは、“図書館利用について”のガイダンスの時だったと思います。初めて入る大学の図書館の広さ、図書の量の多さに驚いたのを覚えています。ガイダンスの時に書庫の中に入れてもらった、本棚にもたくさんの図書があるのになおかつそれ以上の図書が書庫の中にありました。又、図書を借りる手続きをしないと外へ出られないシステムもすごいな、と思いました。

実際の図書館を利用して便利だなと思ったことは、一回生の時に専門科目のレポートに大宮図書館の本が必要になりました。それでカウンターの方の職員の方にお願ひすると、必要な部分をコピーしてくださいました。又、入学したばかりの頃、京都、奈良のお寺について調べようと思って図書館に行くと、公共の図書館にはあま

りない本がたくさんあって、お寺について詳しく調べられて嬉しかったことがありました。深草図書館は特にたくさんの種類の本があります。やはり入学したての頃に、他学部関連の図書から楽しく読める図書もあって感動した私はたくさん本を読もうと思いました。実際、多くの本を読んだともいえませんが、図書館に行つて本棚を見るたびに「あっこんな本もあったんだ」と思うことがあって、読めばよかったと思うことも多かったです。

大宮図書館では、専門科目、特にゼミ発表のためによく詰めて資料を探したり勉強をしました。卒業論文の勉強に取り組んでいます。龍谷大学の宮図書館の蔵書は特に全国的に有名で、龍谷大学が全国に誇れる物の1つだと思っています。私も専門の国文学で貴重な資料の恩恵を受けています。

龍谷大学の図書館にはお世話になりました。図書の利用より勉強の場としての利用のほうが多かったような気がします。大学の図書館という特性を生かしてより便利により学生に浸透した図書館になって欲しいと思います。

(文学部4年)

展観案内

龍谷大学創立350周年記念

龍谷大学図書館蔵
大谷探検隊将来

西域文化資料展

期間 11月6日(月)～11月15日(水)

時間 午前10時～午後4時(ただし15日のみ正午まで)

場所 大宮図書館展観室

どう表現したらいいのか。不思議な雰囲気が私の周りを漂っている。黒茶色した古い大きな木の扉を開けて、中へ入っていく。一瞬、ムツとするような木のおいにおいむせかえり、蒸し暑さが増した感じだ。

——カツカツカツ——

「今日はパンプスをはいていたんだっけ。」

かかとに伝わってくる響きが妙に心地いい。自習室の扉を開けると一斉に皆が注目。

「へへっ」と思わず心の中で照れてしまう。自然と背すじが伸びているのに気づく。カバンを置き、カードボックスへ向かう。

そこには大きな窓があって、図書館の灰色の建物に囲まれた中庭を見下ろせる。中庭といっても何も無い地面が見えるだけで、建物の色と相まってとても殺風景だ。

先程の軽やかな雰囲気から、うって変わって陰鬱な気分させられる。

また、他の棟の窓が見える。一体この図書館には幾つの部屋があるのだろうか、そこには人がいるのだろうか、見当もつかない。まるで病棟の中にいるような気分になる。

そして、地下へ降りるとそこは小学校の実験室のような気配が漂っている。全くこの建物は

不気味だ。

カウンターで煩雑な手続きをすませて書庫に入った途端、埃くささと古い紙のにおいに圧倒される。ここは一面本の森だ。しかも、整然と数え切れない程たくさんの本が眠っている。静かだ。宝物を探す探検家のような気分になる。試しに一冊手に取ってみる。触れるとボロボロとくずれそうな程古い。本をひもとくと、仏教の世界が顕現してくる。だが、私には完全に理解できる程の能力は、残念ながらまだ備わっていないようだ。読んでみると、頭がいたくなってくる。

「君がその本を読むにはまだ早すぎる。」

そんな声が聞こえてきそうだ。

それにもめげず、幾冊かの本を持って書庫を出る。借りてきた本にもあの建物ががもしたす雰囲気が染みこんでいる。このことが図書館図書の本の難解さを増しているのではないかと疑いたくなる。

読み切れる自信は全くない。しかし、図書カードの貸し出し欄がまた一つ埋まるごとにかすかな喜びを感じつつ、図書館を後にした。

(文学部4年)

深草図書館のハイテク

深草図書館唯一のハイテクは、UTLAS (University of Toronto Library Automation System) と呼ばれるものです。

UTLASとは、カナダのトロントにある書誌データベースをコンピュータ通信によって検索し、得た情報を加工・蓄積するシステムのことです。深草図書館にいながらにしてパソコンの端末をただただカナダにあるコンピュータを操作でき、書誌情報を得ることができる画期的なものです。

みなさんは直接UTLASを利用することはできませんが、カードボックスの洋書カードでコンピュータ処理されたカードをみかけたことはないでしょうか。このカードははるばるカナダからやってきたMADE IN CANADAのカードです。どうですか？図書館もなかなか国際的でしょう。

みなさんも読書の秋に、ハイテクにより整理された洋書を読んでみてはいかがでしょうか。

歴史的経営情報の収集

藤田 誠久

企業研究にとって経営情報の収集は、不可欠かつ基本的な作業のひとつである。経営情報といっても歴史的なものから現状分析的なものまでさまざまだが、ここでは歴史的経営情報の収集・発掘について、そのノウハウを伝授しよう。

「史料の在^{ありか}所は匂いでわかる」とある先生から教えられたことがあるが、何も鼻がきかなくとも史料にアプローチすることは可能だ。私の史料への接近方法はだまかに言って次の3つだ。

第1番目は学内関係機関の徹底利用。歴史的経営情報の中で最も基本的なのは社史だろう。幸いにして龍大図書館は、日本で最大と思われる社史コレクション「長尾文庫」を所蔵している。長尾文庫は同文庫にしか所蔵しない独自所蔵社史が百数十点あるくらいだから、たいていの社史は閲覧可能だ。加えて同文庫はクローズドの文庫ではないので、次々と刊行される社史もみることができる。社史ばかりではない。図書館は戦前の企業の営業報告書の集大成をマイクロフィルムで所蔵している。この他にも研究サービスセンターなど学内関係機関を利用すれば、かなりの史料にアプローチできるはずだ。

第2の方法は、国会図書館など公的な学外機関の利用だ。つい最近も大阪証券取引所を利用して、昭和20年代の有価証券報告書を閲覧したが、まず正確な史料名さえ解っていれば、こうした機関は所蔵と利用の可否を電話でも応えてくれる。私は京都府立総合資料館や神戸大学経営分析文献センターなども利用するが、まず電話でレファレンサー(参考係)に聞くことにしている。但し注意しなくてはいけないのは、正確

な史料名を把握してから行なうことだ。「何々関係の史料はありませんか」では話にならない。

こうした方法で入手できる情報でかなりの事を知ることができるが、どうしても「生」の第1次史料が必要となれば、企業に直接アプローチする方法がある。これが第3の方法だ。最近の企業の多くは「社史編纂室」をもったり、「企業史料館」をもっているのだから、こうした所を利用すると便利だ。この場合、「目的」と「利用範囲」を明確にする必要がある。いくらディスクロージャーの時代といっても、第1次史料を出すことには企業も慎重になるからだ。また企業の広報課に問い合わせることも一つの手だが、歴史的経営情報の場合は総務課や文書課の方が有効だろう。

本来、図書館のユニークな利用法なんてない。オーソドックスそのものだ。経営情報を得たければ、足繁くかつこまめに情報に接近する努力を払うことをお勧めする。

(経営学部助教授)



レファレンス

村上美代治

大学図書館は学習や教育・研究に必要な資料を収集、整理、保管し、大学の構成員である学生・教職員の利用に供しています。図書館では利用者のニーズに対応するために、さまざまな業務をおこなっています。今回は、皆さんと関わりのあるレファレンスについて説明しましょう。

みなさんが学業についての相談事や各種証明書を申し込まれるところは所属学部の事務室ですが、学習や課外活動のために資料を入手されるところは情報の核である図書館です。図書館のカウンターでは、閲覧・貸出業務などの各種業務の他、図書館資料が有効に使われるためのレファレンス業務を展開しています。

では、レファレンスとはいったい何でしょうか。ここで、レファレンスについて簡潔に説明しましょう。レファレンスとは日本語では参考業務と訳し、利用者が学習・研究・調査のために情報や資料を求めてきた場合に、図書館員が図書館の資料と機能を活用して情報や資料を提供するなど、利用者と資料を結び付ける仲介的な業務を言います。このサービスでは資料を提供することを原則としていますので、質問に直接回答を出すのではなく、依頼事項の参考文献の紹介や参考文献の所蔵箇所及び利用手段の提示などをおこないます。但し、美術品などの鑑定や市場価格の調査、懸賞問題に関する調査、人生案内や身上相談などには回答できません。ここで、具体的に皆さんから寄せられた質問を紹介しましょう。

★文献調査

日米経済摩擦についての文献を紹介してほしい

★文献所在調査

雑誌「反省会雑誌」はどこにありますか

★統計・データ

大学数と大学生数について知りたい

★図書館の利用案内

目録カードの見方を教えてほしい

事例からレファレンスについて理解して頂けたでしょうか。図書館では、レファレンスを業務の中心に据えていますので、わからないことがあれば遠慮せずにカウンターまでお越し下さい。館員一同お待ちしております。

(深草図書館課)

深草図書館

Library Week

11月13日(月)～17日(金)

①あなたも図書館員コース

②あなたも学者のタマゴコース

◎参加者を募集します!

詳細は
カウンター迄



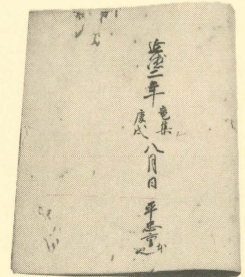
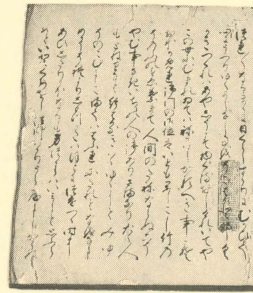
つれづれ草

延徳本

大取一馬

本学図書館所蔵の『つれづれ草』は写字台文庫旧蔵本で一冊本(上巻のみ)。本書は室町時代の写本で、その末尾に延徳二年(1490)八月、平忠重書写の本奥書があるところから延徳本と呼ばれている。『徒然草』の伝本は百種以上もあって、流布本と異本とに大別されるが、この龍大本は異本の中の正徹本系統に属する特異な伝本である。『徒然草』の原作の形態を考える上で最も重要な伝本としてその価値は大きい。

『徒然草』は周知のとおり、南北朝期に生きた卜部兼好が『枕草子』の形態にならって「心にうつりゆくよしなしごとを」筆のままに書きしるした随筆作品である。その内容は人生や恋愛、処世についてだけでなく趣味や信仰等多岐にわたっていて、現代の我々が読んでも非常に興味深く、参考になる書である。例えば、第百十七段には友達について書かれている。友とするのに悪い者として「一つには高くやんごとなき人。二つには若き人。三つには病なく身強き人。四つには酒を好む人。五つには猛く勇める兵。六つには虚言する人。七つには欲深き人」をあげている。その中、六や七はそのまま理解できるが、二の「若き人」や三の「病なく身強き人」がなぜ友として悪いのか、少し戸惑う。しかし、よく考えてみると、確かに若い人はあやまちに落ち入り易い点で友としては不相当であり、無病で丈夫な人も相手を思いやる心が薄くなる点で兼好は嫌ったのである。またこの段では「よき友三つあり」として、「一つには物くるる友。二つには医師、三つには智恵ある友」をあげる。三つ共、なる程そのとおりで、十分



うなづくことができるが、「物くるる友」などとあらわにあげている点に兼好のユーモラスな一面がうかがえ、自然と笑えてくる。また第七段を見ると、「世はさだめなきこそ、いみじけれ」と言っていて、人生が無常であるところにむしろ深い情趣を見出している。そこに兼好の中世的な無常のとらえ方と、王朝的美意識との両面を認めることもできる。この段では、その具体的な例として人間の寿命を取り上げて論じている。人は長く生きても四十に足りないくらいで死ぬべきで、それ以上長生きすると容貌の衰えを恥ずかしく思う心もなくなり、恥をかくことも多く、この世に執着し、ただやたらに生命をむさぼる心ばかりが深くなってものの情趣がわからなくなるというのである。そのように兼好は、老人になることを嫌って、老人を罵倒しているが、兼好自身は六十八歳まで生きたといわれている。理想と現実とは一致しないということであろうか。この点もなかなかおもしろい。『徒然草』は文章もうまく、読んでいて非常に楽しい作品である。楽しみながら生き方について学ぶことができる好著といえよう。

(文学部助教)

龍谷大学 図書館の歴史 1

江戸時代に 図書館はあったか？

成山雅康

龍谷大学は寛永16年(1639)の学寮創建に始まる。創建当初の僧侶養成機関から「大学令」「新制大学」を経て、公教育機関へと質的に変化発展を遂げて今日に至っている。この龍谷大学350年の歴史は同時に龍谷大学図書館の歴史でもある。龍谷大学創立350周年を記念して、龍谷大学図書館の歴史を連載で紹介する。

江戸時代の学寮・学林時代に「図書館」は、果して存在したのだろうか。

学寮・学林関係の初期の記録に次のような記事が認められる。

1649年 図書10部が寄贈された。

(『龍谷講主伝』)

1651年 学費で『俱舎論釈頌疏義鈔』を購入した。

(同書末尾墨書)

1652年 図書出納係として「捨頭」を任命した。

(「学瘁大衆位職制法序」)

これらの記事は学寮創建から10年余を経た頃、既に寄贈・購入を含め図書の収集が行われていたこと、「捨頭」という図書出納係によって図書の閲覧業務が行われていたことを示している。

もうすこし詳しく見てみよう。学寮、学林の運営記録ともいうべき『学林万檢』(大宮図書館所蔵)等に図書館関係記事を多く見ることが出来るが、最も多いのが図書の寄贈・購入記事である。これらによると、僧侶・一般篤志家よりの図書の寄贈が多数に及んだこと、同時に講義に必要な図書が経常経費で購入されたことが多数記載されている。

天明3年(1783)、智洞によって「蔵外之統書

円満之取組」が行われた。これは学寮創建以来収集された図書を再整理することにより、未収蔵図書を確認、その収集を図り、林蔵(学林蔵書)を飛躍的に充実させようとする事業であった。この時、智洞によって作成された初の龍谷大学図書館蔵書目録たる『龍谷学費大蔵目録』には、内典(仏教経典)4577部、外典(それ以外の書籍)122部、合計4699部の所蔵図書が記録されている。この目録にもとづき、補充収集がおこなわれ、天明3年から4年にかけての収集冊数が「数千巻」に及んだという。計画的かつ重点的に収集され、優れた蔵書が構築され、現在の大宮図書館蔵書として引き継がれてきたのである。

図書出納係たる「捨頭」は「蔵司」「知蔵」とも呼ばれ、学林在籍の極めて長い所化より選ばれた。文化4年(1804)、知蔵(捨頭)の役目が明示されているが、これによると蔵書の出納は必ず記帳すること、学林在籍がいかにも長い所化(学生)であっても経蔵(書庫)へは入れてはならないとされている。こうした管理にもかかわらず時として欠本が生じたため、文政3年(1820)、知蔵の経蔵への出入りには上役の「知事」「看護」の立会い、閲覧図書の学外への持出し禁止、学外に居住する所化への貸出禁止等、極めて厳格な管理体制が実施された。

以上、江戸時代学林の「図書館」について簡単に紹介したが、蔵書・経蔵(書庫)・目録・閲覧・係員・学生と図書館を構成する要素が認められる。前近代的ながら「図書館」は存在した、と結論づけたい。(瀬田図書館課)

私の推薦図書

花影

大岡昇平著

(新潮文庫)

のぶかずとし

大岡昇平氏の逝去から随分たつが、それを知ったときに「安らかな老後を求める気持ちは、私にはない。働き続け、苦しみ続けて死ぬつもりである。」とされた氏の凄絶な覚悟に胸を打たれていたことと同時に、なぜこの短編小説も思い浮べていた。

〈銀座のバー——薄幸な女——自殺〉とくればそれだけで既におきまりの褪色的なイメージが付きまとう小説であるように思われるかも知れない。いやイメージ的には誰もが抱くであろうアコースティックなものを私もいまなお持っているけれども、それでいて、何だか非常に健康的な味わいを得ながら読了したことを確実に覚えている。それは私が「死」という決定的な悲劇を、ある美学的な感受性による嗜好から肯定しているからではない。それはたぶん大岡氏が生涯問いつづけていた「生、への執着と、それを支える精神の必然的・普遍的な逆説である「死」という悲しむべき最後の状況が、大岡氏自身の日常的営為を基盤として語られたものにちがいないし、その躍動的な表情が文章にも投影されていたからかも知れない。

(文学研究科)

いいものみつけた

高峰秀子著

(潮出版社)

梅田敦子

私は旅をする時、どんな本を持っていくか選ぶ時が、旅の準備の中でもとりわけ楽しく、旅に良い本の条件を自分なりに持っている。その旅の目的にもよるが、私の様に買物や食事が最大の目的となる旅には、軽い、短編集やエッセイ的なものが良く、その舞台や背景がその旅先の地なら尚楽しいだろう。

これは最適!!という本を旅行前に頂いた事がある。高峰秀子さんの『いいものみつけた』がそれだ。著者が普段の生活の中でみつけ、愛している「いいもの」が、簡潔で楽しい文章に美しい写真を添えて紹介されている。それはブルーノマリの靴や宝石や毛皮から、仏壇や物干しバサミ迄、実にバラエティーに富んでいて、それにまつわるお話も又おもしろく興味深いものばかりだ。

飛行機の中で、眠る前ベッドで、パラパラめくるのに実に丁度良い本だ。旅先の店を覗いて、「私のいいものみつけた」をつくるのも、旅を一層楽しくしてくれる。

(文学部4年)

龍谷大学図書館報『来・ぶらり』創刊号

1989年11月発行

編集・発行 龍谷大学図書館

〒612 京都市伏見区深草塚本町67

☎075-642-1111(代)